

名工の伯樂②

ゴットフリード・ワグネル

レオン・ジュリーが教育を通じて京都の新産業政策に貢献した人物ならば、独人ゴットフリード・ワグネルは技術スペツシャリストとして、洋式工業化に貢献した御雇い外人であった。

一八三一年(天保二年)、ドイツのハノーバ生まれのワグネルは、十五歳の時から自然化学、数学を学び、ゲッチンゲン大学では、さらに物理学、機械学、地質学を修め、二十一歳でドクトルの学位を得ている。その後パリで研究を続けたが、ワグネルの興味は物理と化学であった。長崎にやってきたのは慶応四年、石鹼工場の技師として招かれたが、その計画は中止となり、陶磁器の製法を伝授、石炭窯を考案するなど専門知識を活かした。明治三年、東京によれば、大学南校、東校(東大の前身)の教師を勤め、明治九年八月、



舎密局の教師として京都に着任している。

ワグネルは医学校で理化学を教えるとともに、舎密局では、陶磁器、磁瑯、硝子器、石鹼、染色、機械製造の指導に当たっている。

当時の京都府は染織が中心産業で、その振興に明治初年より力を注いでいた。舎密局に染殿を設け、勸業場に織殿を設けた事実からもそれは明らかである。

西陣の織物が明治中期から他の産地より優位に立てたのは、こうした基礎技術研修の場があったからである。

染殿について言えば、その機能を十分に果たすことができたのは、ワグネルの幅広い専門知識がフルに活かされたからだろう。人造染料が使われ始めた当初は、その正しい使用法が理解されず、京染の信用も一時は失われるほどだった。そのため京都府は人材をヨーロッパに送り新式の染色法を学ばせるなど、手をつくしていたが、ワグネルの登場により、すぐれた染色法を会得することができたのである。学理だけでなく実習にもすぐれた手腕があったからこそ、適切な指導ができたのだろう。